



支援員だより

発行者：山口県・財団法人山口県ひとつくり財団

もくじ

- 
- P 1 支援員さんの声
 - P 2 ナベヅルについて
 - P 3 研修会実施報告
 - P 4 講師寄稿「榎野川河口干潟の再生」、お知らせ

支援員さんの声

「子どもと大人の環境を考える講座を開催して」

◇ キッズサマースクール

「これって何」「あっ、ここにもあったよ」「何々、調べてみよう」

7月23日（土）と8月20日（土）の2日間、長野山緑地公園と大田原自然の家において、子どもたちを対象に「野山の自然探検教室」を開催しました。

1日目は「自然の仕組みと里山に生きる生物について」の講話と「動植物の調査」の実地体験で、森林インストラクターの橋本順子さんによる生態系のしくみの説明を子ども達は目を丸くしながら興味深く聞き、長野山にどんな生き物が暮らし、それらが生態系ピラミッドの何処に位置しているかをみんなで考えながら調べました。また、野外での動植物調査や、土壌生物の調査では、子ども達の興味深い眼に驚嘆させられ、この素晴らしい興味の眼・観察眼をいつまでも持ち続けられるよう指導したいと思いました。また、環境学習推進センターの徳永さんの指導により、渋川ふれあいの家近辺の錦川支流で水辺の教室を開催し、水中生物の探索の眼を養うことができました。2日目は森林インストラクターの金丸恵子さんを講師に、「自然の不思議」をゲームとDVDを利用して学び、自然の不思議さやおもしろさを再発見し、野外活動では、自然の家の遊歩道でイノシシのぬた場等を発見するなど、感激の体験が多く、植物や動物の生態を楽しく学ぶことができました。



地元での活動の様子を福本勝さんにお寄せいただきました。

鹿野里山の会 福本 勝

◇ 里地・里山の環境を考えるセミナー

「いつも見ている自然なのにこんな生態があるなんて感激したよ」

8月27日（土）と9月10日（土）の2日間、鹿野の豊鹿里・せせらぎパークを中心に大人を対象とした「生物多様性と里地・里山の生態系を考えるセミナー」を開催しました。

1日目は、里山ビオトープ二俣瀬を作る会の西原一誠さんを講師に、里地・里山の重要性や役割、里山の現状と問題点、動物相や食物連鎖、昆虫類の生活史、生物多様性の危機と保全等を体系的に学び、出席者から話が興味深かったと大変好評でした。「近年、人の手が入らない里山の状況を憂う人が多いが、自分達もどうしていいのかわかんよな」「最近動物が人里に出てくることが多いがこれも関係があるのかな」「外来生物によって生態系が壊されるってどういうことだ」等いろいろな話で盛り上がりました。

2日目は、秋吉台エコミュージアムの田原義寛さんを講師に、荒廃する里地・里山をテーマに生物多様性の危機、棚田の荒廃、竹林の増加、草原の生態、外来種の問題等を体系的に学ぶことができました。

中が見えない箱に手を入れて何が入っているかを当てるゲームでは、「あんたから先にやれよ」「あんたも気が弱いの一」「ヒヤー」と皆ビクビク・・・。

中身はウシガエル・オオクチバス・ジャンボタニシ・ホテイアオイ等で、これらが、侵略的外来種と知って一同びっくり。

4日間という短い勉強会でしたが得るものは大変多く、これからも自分も勉強し、地域の皆さんに自然のすばらしさを少しずつ伝え、共有していく活動を続けていきたいと強く感じています。





ナベヅルについて



山口県自然保護課

ナベヅルとは、ツル科ツル属に分類される大型の鳥類で、シベリア南東部や中国北東部で繁殖し、冬に日本に渡ってきます。

ナベヅルの渡来地である周南市八代は、「八代のツルおよびその渡来地」として、昭和30年に国の特別天然記念物に指定され、保護されています。また、昭和39年には県鳥に指定されています。かつては多くのツルが渡来していましたが、昭和15年の355羽をピークに減少傾向にあり、平成22年度は8羽となっています。レッドデータブックやまぐちでは、絶滅危惧IA類に分類されています。

八代では、このような減少傾向に歯止めをかけ、渡来数を回復するための様々な取組が行われており、今回は、その一部についてご紹介します。

1 ねぐら整備

ナベヅルは、日中、盆地の水田へ降りてきて、モミや草の実、ドジョウなどの餌を食べたり、羽づくろいをしたりして過ごしていますが、夜間は、盆地から離れた谷間の狭隘な水田をねぐらとしています。かつてねぐらとして利用されていた水田は、政府の減反政策や農家の高齢化に伴い、植林されたり、耕作放棄地として荒地となり、ねぐらが消失しました。このため、このような耕作放棄地の草や木を刈って、ツルがねぐらとして利用できるように、毎年10月上旬に、ツル保護団体やボランティアによる環境整備が行われています。今年も10月1日（土）に実施され、自然保護課からも参加しました。



2 デコイによる誘因

渡来したツルを確実に定着させ、通過するツルを引きつけることを目的に、平成10年から、ナベヅルの模型（デコイ）をねぐらや餌場に置いておく、誘因事業が行われています。デコイに気づいたツルが、デコイに近づくことが確認されました。

ナベヅルは、家族単位で一定のなわばりを持ち、他のツルが自分たちのなわばりに侵入してくると、威嚇して追い払います。なわばり争いに負けて、どこかへ飛び去っていくツルがいますが、デコイによって他の餌場へ誘因、定着させる例もありました。



野生の2羽以外はデコイ

3 ナベヅルの移送

八代には毎年同じツルの親鳥が渡来しており、幼鳥は連れてきますが、若いツルの群れは渡来しません。この親鳥が死ぬと、渡来数は減少していくと考えられています。このため、若いツルを人工的に連れてくることが検討されました。

多くのツルが渡来する出水市と様々な協議を重ね、平成18年2月に、傷病のため出水市で保護されたツルを八代に初めて移送し、その後も出水市の協力を得ながら、定期的に保護ツルの移送を行っています。移送されたツルは、治療・飼育され、放鳥、馴化期間を経て、北帰行していきます。この若いツルが、再び八代に渡来することが期待されているところです。



平成23年10月26日

今季初めてのナベヅルが渡来しました。





第2回研修会：山口県セミナーパーク

〈10月23日（日）〉

「外来生物」の講義、「榎野川河口干潟の保全活動」についての講義と野外観察、支援員の活動発表と意見交換会を行いました。

「外来生物」の講義では、外来生物が環境に与える影響や外来生物法、山口県で生育情報がある特定外来生物について説明を受けました。また、榎野川河口干潟でベルトトランセクト法等の調査方法について説明を受けた後、地図上に生息場所を記入する調査を行い、オサガニ、ヤマトオサガニ、ハクセンシオマネキ、ニホンスナモグリ、アナジャコ、カブトガニ、ウミウシ等を観察、同定し生息場所を記入しました。講義では、干潟の機能や保全活動と経年調査の結果等をグラフで示され活動の成果を知る機会となりました。

支援員の活動発表では、NPO法人しものせき自然生態系サポートワークの乾氏と古市節分草保存会の林氏に活動の経緯と様子等を発表していただきました。その他、研修会に参加した支援員の方々と意見交換会を行いました。



第3回研修会：山口県立山口博物館

〈11月13日（日）〉

「支援員の役割」、「博物館展示から見る山口の自然環境」、「フィールドサイン」についての講義と野外観察を行いました。

「支援員の役割」の講義では、①自然にふれあうこと ②県内で行われる自然保全活動への参加 ③盗掘を防ぐための啓発活動 ④飼っている動植物を放さない、捨てないこと等のほか県内のツキノワグマの現状と県の取組みについて説明を受けました。また、「フィールドサイン」では、身近な里山の動物の痕跡を探す方法を実地と講義から学びました。野外で、動物の巣穴や糞、かじられた木の実を探し、講義では生態等も学び、身近な里山で生活する動物を観察するための痕跡の見つけ方を学びました。

博物館展示では、山口県の地域ごとの地層から出土した化石等を見たり、動物の剥製と骨格標本から読み取れる動物の足の使い方等の説明を受けました。



参加者から研修会への意見・要望等をいただきました。一部をご紹介します。いただいたご意見は、来年度以降の参考にしたいと思います。

- ・地方の特色のある保護活動の報告に頭がさがる思いがした。このような地道な活動をやっている方々が、山口県には沢山いると思うので、紹介の場を設置してほしい。
- ・人と自然の関わりを持つボランティア団体、NPOなどは未だ少ないのではないかと思います。多くの活動報告を聞いてみたいです。
- ・現地実習にもっと時間をとると良い。
- ・調査方法等フィールドでの具体的な研修ができたらいいなと感じました。
- ・時間がある限り、都合をつけて出席したいと思います。
- ・山口県は四方に広がっているので、研修会は西部（宇部、小野田、下関）、東部（岩国、周南）北部（萩、長門）でも行えば支援員の輪も広がるし、各地域独特の問題点も提起されると思う。



榎野川河口干潟の再生



第2回研修会講師 山口県環境保健センター 角野浩二氏

榎野川河口域は、かつてはアサリ等の二枚貝やエビが捕れる豊かな干潟でしたが、平成3年以降アサリがほとんど捕れなくなるなど干潟の生態系が変化してきました。そこで平成16年8月、自然再生推進法による枠組を活用して設立した「榎野川河口域・干潟自然再生協議会」を中心に産学民公の連携・協働による干潟再生の取組を実施しています。

約3.4 km²の干潟が残る榎野川河口干潟のうち、南東に位置する南潟は、昔に比べて硬質化、無機質化したため生物が少なくなっています。南潟は、カブトガニの産卵・生息場であることから、できるだけカブトガニに影響を与えないよう注意しながら、人力により干潟の耕耘、竹柵の設置などを行い、以前の生物が多く生息する豊かな干潟の再生を目指し活動しています。当面、成果の分かりやすさから、再生の象徴種としてのアサリの数を増やすことを目標の一つにしています。平成16年の事前調査では、アサリはほとんどみられませんでした。平成17年に活動を開始し、その翌年には耕耘した場所で最大約1,800個/m²のアサリが確認されました。しかし、冬季に減耗してしまい、越冬する個体が非常に少なく、大きなアサリはみられませんでした。一方、竹柵内では設置2年目以降は干潟の土がアサリに合わなくなったため、アサリは減少してしまいました。平成19年にはナルトビエイ等からの食害防止のために、網を干潟に設置したところ、冬季の減耗が少なく網の下では多くのアサリが生息していました。これは食害防止だけでなく網により稚貝が集積されたことや、波浪の影響が抑制されたことも理由の一つだと考えています。平成20年には殻長30mm以上のアサリが約800個/m²確認され、網の下だけという狭い範囲ですが約20年ぶりの潮干狩りを行うことが出来ました。

網の下の生物を調べてみると、何もしていないところと比べて生物の数と種類が多いことがわかりました。網はアサリだけでなく、他の生物にとって棲みやすい環境になっているようです。また、竹柵内は生物の数は少ないですが、他の場所とは違う種類の生物が生息しており、生きている化石と言われるミドリシャミセンガイも竹柵内でのみ確認されました。干潟に少し変化を与え多様な環境をつくってやることで、その環境に合った生物が生息し、生物の多様性が増加したものと考えられます。



ミドリシャミセンガイ

榎野川河口干潟での再生活動は「やれることからやっていく」をモットーに、試行錯誤しながら効果的な方法を模索し実施しています。うまくいかないこともあります。現状では、活動以前はほとんど見られなかった大型のアサリが多数生息するようになりました。アサリの増加は人々が干潟に関心を持ち干潟の役割や機能を知ってもらう機会になると考えています。

なお、干潟には漁業権が設定されていますので観察会を行う際は事前に漁協へ連絡し、了解をとってから行うようにしています。

お知らせ

平成24年3月11日（日）午前10時から午後3時までの予定で、「こども自然共生活動推進プログラム」の体験発表会を行います。

こどもが自然とのふれあいと自然環境保全の実践を通して、自然のすばらしさや大切さを実感し学ぶために団体が実施した活動を発表する会です。団体の活動の様子を知る機会ですので、ぜひご参加ください。

なお、団体の活動発表に併せて水中写真家の中村征夫氏を講師として環境学習講演会を開催します。



発行元：(財)山口県ひとづくり財団 県民学習部 環境学習推進センター
〒754-0893 山口市秋穂二島1062 TEL 083-987-1110 FAX 083-987-1720
<http://eco.pref.yamaguchi.lg.jp/learning/>

